昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和六十一年一月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十八巻 第一号
（通第四三八）

目次

大悲回向……近角常観……(1)
心の住家……井上善右ヱ門……(6)
慈光日誌抄……西元宗助……(9)
一道会の記……榊原徳草……(11)
無相師法語……岩崎成章……(18)
源左の智慧……辛川忠雄……(23)

大悲回向

近角常観

前来しば〳〵述べるように仏陀の恵が心に到って下さったところが信仰である。

私自身が大層苦しんだ最後に、成程真に我れを恵んで下さる真の親とも真の朋友とも云うべきは御仏である、ああ実に有り難いと心が開け来ると、如何にも自分は悪いものである。若し仏陀の御恵に気付かずに我が心まかせにして置いたならば、如何なる乱暴の振舞にもしかねぬものであると自分自身で懺悔をした。自分の本性が解って見て、中心から慚愧心が起って来たところに、此の如く自分の悪性なることを知らして頂くは実に有り難いと大に喜んだ、これ所謂機法の深信である。

さて此の如き信仰には如何にして入るかというに、昔から、かく〳〵思うのであるとか、思わねばならぬとかと律法的に陥り、甚しきに至っては信仰最初の一念限り二種の深信がある、第二念以後は法の深信ばかりであるとか、或は最初の一念は法の深信ばかりで、第二念以後は機の深信が起るのだとか、種々に八釜敷く云うと聞いて居ったが、私自身の信仰問題から云えば、かくの如く限ったことは云えぬ。あゝ有り難いという下に悪いものなりという心があり、悪いものなりというところにあゝ有り難いという思いがかならずある。四年以前に黒田最勝君が信仰に入ったときには、これまでいろ〳〵と理屈を考えて、仏があるとか無いとかいうて仏陀を蔑ろにして居ったが、図らず如来の御恵に気付いて来て、もうたまらないで私のところへ出て来た。その様子は非常である、今思い出しても同情にたえられぬ。その時自分は実に誹謗正法の大罪人である、今日まで仏陀無限の大悲に気付かなかったと涙を流して懺悔せられた。又無漏貢君が仏陀の恵に気付いたときは、あゝ有り難い、私はこれでやるのだと大に力味んでやって来た。其後両君が同じ日に信仰告白をせられた時は、黒田君は障子を開けて入り来りえらい勢で「建仁第三の暦春の頃（聖人二十九歳）隠遁の志にひかれて源空聖人の吉水の禅房に

尋ね参り給ひき」私は此間九段の求道会の座で仏陀の大なる恵に気付かして頂いた。初めてこんな有り難いことに遇うた。如何なることがあってもこの喜びを世の人に頒つことに一身を投ずるのだと、前に泣いた人が、此度は歓喜のあまり威張り出した。これに反して無漏田君は、此度は私は永い間この有り難い聖教を捨てゝ、キリスト教に入るなどして仏陀にそむいたのはまことに申訳がないと泣きながらの懺悔であった。あながちに泣いたのが機の深信、喜んだのが法の深信とも云えぬが、併し暫く分けて罪悪懺悔の心と願力感謝の心と云うて見れば、此深信の二種の有様は後先が無いということはこれで分明である。まことに済まぬと思う下にあゝ有り難いというて居る、実際は一つものである。歎異抄に、

聖人の常の仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを助けんとおぼしめし立ちける本願のかたぢけなさよと御述懐そふらいしことを、今また案ずるに善導の自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈み、常に流転して、出離の縁あることなき身と知れという金言に、すこしもたがはせおはしまさず。

と云うてある。仏陀の救済を喜ぶと、自己は罪悪の塊なりと知るとは一つであるということはこの文でも明白である。

和讃に「願力無窮にましませば、罪業深重もおもからず」とある。願の強いのは罪業の重いので知らるべく、我罪業深重の故に願力が手強くかゝるのである。仏の願力もし罪業を助けずんば、願も徒然である、力も虚設である。深重の罪業を救済するから、願力が広大無限である。この願力無窮と罪業深重との二つでは一つの大悲回向の信心の有様である。

此信仰の有様を、阿弥陀仏の本願の文に、至心・信楽・欲生我国の三信とあらわしてある。聖人は信巻に於て一々字訓を施して、詳細に実験的意義を表示せられてあるが、字訓のことは、今一々之を述べる暇がないのでこれを略して唯三信の大要を述べて見ようと思う。先ず至心は真実で仏陀に対してまことなること、信楽は疑なく仏陀を愛し喜ぶこと、欲生は仏陀の御許に生れんとの希望である。これを今日の信仰界の言辞で云えば、信愛望の三というてよかろうと思う。そこで聖人の意で之を云えば、その至心の真実は信の字に入り、欲生の希望は仏陀を愛楽することに帰するから、三信が終に信楽の一心である。一言に云えば如来の、直に来れとのたもう御言を一点疑なく、有り難いと喜ぶが信楽である。然らば何故に丁寧に三つに分つてあらわしたかというに此の如く疑の晴れる本は何であるかとい

えば第一番が至心即ち誠実である。我々は誠実にせざるべからずと考えて誠実ならんとすればいよ〳〵誠実なること能わず。これを私の経験で云うて見ると、初めから自分は到底誠実になし能わぬと気付かぬ。さて色々に試みても遂に誠実になし能わぬが、人として誠実にせずともよいと止むべきではない。然るにこの如き不実の者に対して直実にして下さるのが仏陀である、これが即ち至心である。この如来の真実を知らずして、自ら真実にせんとする故に大に苦しんだのである。親鸞聖人は、

一切群生海、無始より已来乃至今日今時に至るまで穢悪汚染にして清浄の心無く、虚仮諂偽にして真実の心なし。

と云われた。我等は遠い昔から誠実ならんとして得ざるものである。是に就て善導大師は、

外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くを得ざれ。

と云われたのを、若し律法的にとると、とてもその通り出来ぬ、実に内愚外賢である。故に聖人は

外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり。

と読んで、我々は自性からが悪である、偽である、如何にしても真実至誠なること能わざるものである。罪悪の塊であってみれば賢善精進の相を現ずる勿れ。如何にしても中心誠実に為し得ざるものである。而も自己の不実偽善なることに中心より気付く所以は、唯如来のみ真実にてましますと頂けたからであって、この時は我れ如き不実のものに対して、至誠を垂れて下さるは唯仏陀のみと仰ぐばかりである。

次は信楽である。即ち私の実験では、どうか仏陀を信じたい、仏陀を愛したいと思うて一向そうなり得られぬ。私が苦しんだ時に、如何に他人を信じたいと思うても信ぜられぬ、自分が信じたいという言葉の裏面はたしかに人を疑って居るのである。信じ得ないで疑っているのは、他に対して誠実になし能わない所以である。如何に先方が悪くとも、我れは捨てず、向うに何事があっても我はこれを疑わず愛するのが至誠真実であるが、我れは悉く人を疑い隔てて居った自分は到底真実になり得ざるものなるか。どうか世の中に向うから疑わず、隔てぬものが無いであろうか、向うが疑わずに愛してくれるものが無いかと頻りに求めた。最後に此方から求めるには及ばぬ、久しき以前から我れ如き悪しきものを真に恵みつゝあるのが大慈悲の仏陀であると解って来た、即ち信楽は如来の我を愛したまう大慈悲である。信巻には

然るに無始より已来、一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦海に繋縛せられて、清浄の信楽なし、法爾として真実の信楽なし(中略)一切凡小一切時の中に、

貪愛の心常によく善心を汚がし瞋憎の心常によく法財を焼く、急作急修して頭燃を炙ふが如くすれども、衆て雑毒雑修の善と名く、亦虚仮諂偽の行と名く、真実の業と名けざるなり。この虚仮雑毒の善を以て無量光明土に生れんと欲する此れ必ず不可なり。

と云うてある。我等はどれだけ立派に行が出来ても、貪愛瞋嫌の心の為に侵されて、真実の愛心が出て来ぬ。然らば如何にすべきかと云うに、信巻の次の文に、

如来苦悩の有情を悲憐して無碍広大の浄信を以て諸有海に廻施したまへり。

と云うてある。その広大の如来清浄願心を廻施したまう有様は、次の欲生のところに於てよく味わるる。

欲生というはどうかというに、我々は信仰を得たい、往生の心を起したいと思うても、此方から仏陀に向って行く回向心は到底駄目である。私の経験でいうと、自分は他に対して真実なることを得ざるゆえ、遂に互に疑い互に隔てるにいたる。こんなことではいかぬ、此方から開いて行かねばならぬ、向うから悪くしても此方から善くすれば善くなるのである、何時までも互に争い合いしてはいかぬものである、我より心を開きて他に譲ればよいとまで思うても実際は譲られぬ。此方のものを他に向け、自分の心を飜えして他に譲る回向心は私には実は無いのであった。信巻に

これを

然るに微塵界の有情、煩悩海に流転し生死海に漂没して真実の回向心なし、清浄の回向心なし。

と云うて置かれた。我々はまことに浅間しいもので他に対して誠実なること能わず、却って向うを疑い隔てる、此方からは如何にしても心を開いて向うことが出来ぬ。この如きものに対して仏陀は、誠ならぬものに誠にして下され、疑うものを疑いたまわず、向わぬものにどこまでも恵を向けて下さる。これが大悲回向である。

抑々広大の慈悲の御親、南無阿弥陀仏それ自身が即ち真実である。よりて「至心は至徳の尊号を体とす」というてある。真実は即ち大慈大悲である。よりて「利他回向の至心を以て信楽の体とするなり」というがこれである。いつまでも変らず飽くまで恵んで下さるのである。此の如く如来の方から真実慈悲を向けて下さるが回向心である。故に「欲生といふは即ちこれ如来諸有の群生を招喚したまふ勅命なり、即ち真実の信楽を以て欲生の体とするなり、誠にこれ大小凡聖定散自力の回向に非ず、故に不回向と名くるなり」と云われてある。それであるから至心・信楽・欲生の三信は三あるにあらずして唯一つである。例えば水の清きは至心、なみ〳〵と湛えてあるは慈悲、即ち信楽、この清く湛えた水を注ぎかけて下さるが大悲回向とも欲生とも

いう、即ち招喚の勅命である、広大なる仏心南無阿弥陀仏をなみなみと注ぎ込んで下さるのが如来回向である。此の如き広大の信仰であるから、相対的の言辞では何ともいうことが出来ぬ、善であるとか、悪であるとか、頓に開けたとか漸々に開けたとか云うことが出来ぬ、如何なる形容詞を以てしても之を表わすことが出来ぬ。よりて信巻に、

凡そ大信海を按ずれば、貴賤緇素を簡ばず、男女老少を謂はず、造罪の多少を問はず、修業の久近を論ぜず、行に非ず、善に非ず、頓に非ず、漸に非ず、定に非ず、散に非ず、正観に非ず、邪観に非ず、有念に非ず、無念に非ず、尋常に非ず、臨終に非ず、多念に非ず、一念に非ず、唯是不可思議不可説の信楽なり、喩へば阿伽陀薬の能く一切の毒を滅するが如し、如来誓願の薬の能く、智愚の毒を滅するなり。

と嘆美してある。大水の来り満たすが如くであるから唯もう絶対不可思議の信楽である、大悲回向の信楽である、横超他力の信楽である。

終に臨んで特に諸君の注意を乞うことは、清き水をなみなみと我胸の中に注ぎ込んで下さるという点、これ即ち大悲回向の信心であって、即ち開巻に述べた如く真宗の眼目である。

『親鸞聖人の信仰』より

62.3.17

波岡茂輝歌集より

一人あらば二人と思へと訓へたまふ祖師の御言葉尊きろかも

我が如き思ひあがれるさかしらを助けたまはむ弘誓なりしか

日輪はたださん〳〵と輝けり樹にこそ暗き蔭はありけれ

源の濁れる川もひたすらに海にそそぎておのづから澄む

何事か成し得べしとの夢さめてあやまり果てし後に道あり

大き泡と小さき泡とゆく水の流るるままに流れゆくなり

Fichte. 1762-1814

心の住家

デカ

井上善右エ門

われわれは誰しも気づかずに自分の心の住家を持っているものです。しかもその事を意識しませんから、自分は何も特別なものを持ってはいないと言います。しかも何もないなら意見を述べることも応答することも出来ないのではありませんか。また日常生活の出来事に対処する際、人それ〴〵に、見方、考方、感じ方が違うてくるのは何故でしょう。そこには何かそれ〴〵の内なる心の拠り処があるといわねばなりません。

さてその内なるものを、その人の意見として外に表わす場合、理屈というものが必ず附着してきます。言葉には筋がなければならぬからです。全く筋道のない言葉は寝言として無視されます。だから自分の思いを主張するときは理を立て、正当化するのです。しかも理だけで意見が成り立っているなら彼此一致するわけです。ところが正反対の意見が現われます。それは理屈以上の何か背後にあって然らしめると言わねばなりません。ドイツの哲人フィヒテが「如何なる思想をもつかは如何なる人格をもつかによる」と言ったのは、事の核心を指摘した言葉といえましょう。

ところで一つ面倒なことは、表の理屈だけで内なる正体を論理的に引出すことは出来ないということです。例えば虚礼だから年賀状は廃止すべしと説く人があるとします。ところが実はその人が筆不精で書くことを好まないのが本音だとしても、虚礼廃止という言分だけで筆不精を証明することは出来ません。そのため勝手な理屈がいつまでも立ちはだかり、実りのない論争や理屈が我物顔に横行して、世を乱していることが実に現代は多いと思われるのです。この点からも奥なる心の住家が真剣に問いただされねばならぬでありましょう。

さてその内なる住家は、他に対するよりも更に深く自己自身に関わる問題であります。波瀾に富む人生の出来事を、われわれがどう受取るか、どう取扱うか、どう対処するかによって、人生は大きく変貌します。悲しい人生ともなり、

自我
似我

苦しい人生ともなり、また豊な人生ともなります。心の住家が歪んでいると人生を正しく受取ることが出来ません。あるべきように受取ることが出来なければ、無理な摩擦を生じて苦悩せざるを得ません。ではそのわが心の住家を如何にたゞし、如何に整えるべきかゞ最も大切な問題となります。

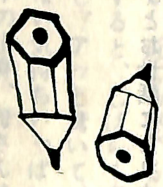
それには先ずわが内なる住家がさながらに照し出されることが必要でしょう。鏡の前に立ってこそ己れを知り己れを正すことができます。その鏡の前に立つごとく己れを照す真実の前に立たねばなりません。その真実そのものに遇いうる身であるところに人間に生れた根本の尊さがあります。わが心の住家は孤独な一軒屋であったのではなく、大いなる真実に既に〳〵深く関係づけられていたのです。聞法とはその深く結ばれた関係をたどり進んでその根源に気づかしめられる道です。それがちゃんとたどれるように用意されているのが真実の教えというものです。その教えを聞思しつつその道をたどりゆくとき、必ずわが如実の姿が照し出されてきます。如何に照し出されて来るかと云えば、わが住家の土台が無条件に固執された幻の自我であったということです。幻の自我とは本当の自我ではない似我の影であるということです。事々に俺が俺がと思いつゞけてきたのが幻への執着であったと知らしめられます。それが我執の迷いというものです。我執が本になって我所執が生じます。我所執というのは我の所有に対する執着ということです。財・地位・名誉はもとより、己が能力への執われ、それにもとづく傲等々、自からを縛り自からを苦しめる煩悩はこと〴〵く我執我所執に由来するものです。我執が土台になってその上に人それ〴〵に異なる知情意の家が建ちます。それを住家とするのが人間であります。

その自己の住家の本質を照し出すものは、自己を超えた真実そのものの働きによるのですが、その照す働きを光明というのはまことに自然なる言葉といわねばなりません。その光は照すと共に摂め取る光明です。照し出すことによって執我の閉鎖性が破られ摂取不捨の大慈悲が成就されます。如何なる迷いをも摂取するまで止まぬ働き、これを大慈大悲といわずして何と言いましょう。

大無量寿経にはこの光明が第十二願において誓われています。そしてその成就が十二の光明として讃嘆され、それを結んで「斯の光に遇う者は三垢消滅し身意柔軟にして歓喜勇躍し善心生ず」と説かれています。さらに第三十三願には「わが光明を蒙りてその身に触れん者身心柔軟にして人天に超過せん」と重ねて誓われています。身心柔軟とは我執の迷が溶かされ散じられて真の自由が現じる妙なる心の姿であります。親鸞聖人は必ず涅槃の覚を開くに至る真仏弟子を釈されるところ（信巻末）に、この第三十三の触光柔軟の誓いを引証して真仏弟子を裏づけておられるのであります。

かかる光明に摂取される心中を信心といいます。即ち疑うにも疑いえぬ真実に目みえてほれ〴〵と仰ぐ心相であります。その時その人の心の住家は最早や業によって作られた執我の家ではありません。執の殻はあっても、その殻がそのまゝ真実の大悲に貫かれている光明の家であります。それはまたわが立つ大地にも喩えられます。聖人が「心を弘誓の仏地に樹て念を難思の法海に流す」と仰言ったのは閉ざされた幻の家から大悲真実の住家に転入したよろこびを述懐された言葉であります。その時こそわれわれが本当に人間と生れたよろこびを知らしめられる時であります。

（昭和六十年十二月五日）



聖語抄

○

さとりは多く学ぶことを要せぬ。一偈といえども真にその意を解して、道を修むればさとりをうることが出来る。

○

一句の法文もおぼえられぬハントクに、仏陀は一本の箒をさずけて

「塵を払わん、垢を除かん！」

と繰り返さしめられた。ハントクはそれだけでさとりに入った。

新刊書紹介

無相法信集　岩崎成章編著

発行所　京都市下京区上珠数屋町烏丸東入
西村為法館
定価　一〇〇〇円、送料二五〇円。
振替　京都（2）五六四八

慈光日誌抄

西元宗助

新しい年を迎えます。旧年中、なにかとお世話になりました。本年もまた何卒よろしくお願い申しあげます。

尤もこのように申しましても、書いているただ今は、まだ年末でございます。しかし、このように書かせていただきますと、年末に身はありながらも、すでに当来の新しき年の世界の一端をいただいているような、すがすがしい気持ちになるから不思議であります。

○

旧年の『慈光』十一月号に村上速水先生の「自力から他力へ」なる玉文を拝読する。まことに有難い。先生は龍谷大学教授、ご専門は真宗学。かねてから尊敬申しあげている方であるが、先年、脳血栓で倒れられた。一時は再起不能でおありかと案じられましたが、多少の言語障害を残して全治せられたのは、まことに喜ばしい。そして先生の近著『親鸞教義の誤解と理解』(永田文昌堂刊)の末尾の「病いに生かされて」に見られるように、先生のご信境はいよいよ深まれたようである。

二、三年前であったが、先生の勧学就任のささやかな祝賀会に招かれた私、説教なされることの多い勧学さまの中で、おそらく先生は殆んど唯一の、「聞法の勧学」であられると、そのお徳をたたえたことである。そういえば先生は、洛西・浄住寺での秋の一道会にも、よく聴聞のお姿をお見受けする。また本願寺会館でも。

○

さて旧年十一月も、案外、忙しい日々でありました。そして教えられることの多い日々でございました。

広島には、藤秀璻先生の三周忌追悼記念講演をかねて参りました。藤先生を偲ぶ会と広島大学仏教青年会との共催で、会場いっぱいの参加者。そして終了後、仏青の諸君と活潑な座談会をもつことが出来たのは、楽しいことでありました。

なお現在、一般の大学で仏青のあるのは東京大学と九州大学と広島大学の三大学にすぎぬという。広島大学仏青の今もなお盛んなのは、戦前から福島政雄・白井成允両先生はじめ現在も理学部の松田教授など篤信の先生がたの指導と援助によるもので、広島市民の支援を得て、広大仏青の会館建設を計画しているとのことであった。是非、実現させたいものである。

○

広島の法正寺さんの報恩講での法話で、石見の才市の詩

わたしや
あなたに拝まれて
助ってくれと拝まれて
ご恩うれしや　ナムアミダブツ

を黒板に書いて、例によって「あなたにおがまれて」のあなたとは、どなたのことと尋ねると高校三年の秀くんが「仏さま」と答えてくれた。ふだんは私、ここで有難うと言って話をすすめていくのでありますが、近ごろ感ずることあって「仏さまだけですか」と追及すると、しばらく考えて〝父、母〟と答えてくれた。わたし、アッと驚いて、この少林寺拳法一級の秀ちゃんを拝みたい気持ちいっぱいになった。なおその父さんは龍大教育学の出身、母さんは京都女子大の出身、さすがである。

○

十一月末には名古屋の信道会館主催の講演のあと、家妻と共に久し振りに菊住小学校の傍の花田正夫先生のお宅を訪れる。

奥さまは、やつれて寝ておられる。先生は私どもの突然の訪問のため、床から起き上ってくださったような御様子。あまりにもお痛わしい。申訳ないというか、すまない気持ちいっぱいになる。

しかし、お顔を仰ぐと、寂かに照りかがやいていられる。そして、いよいよ店じまいのときがせまってまいりましたと仰せになる。奥さまは、奥の方から、『慈光』誌、誤植が多くなりまして申訳ございません、それにお忙しいのに毎月、原稿ありがとうございますと仰せになる。

しばらくして私ども、先生に玄関の門口まで見送られて、小雨の降るなかを辞去する。

読者の皆様、お互い覚悟はよいか。まことに、なんまんだぶつの、お正月でございます。

一道会の記

榊原徳草

昭和六十年十月二十七日、午後一時より池山榮吉先生の第四十八回忌の一道会を開催、御参集の法友達は東京から長崎迄の広い範囲から約八、九十人の方々でありました。四十八回忌の四十八は、「四十八願成就して、正覚の弥陀となりたまふ、たのみをかけし人はみな、往生必ず定まりぬ」の御和讃をも思い出されますし、又聖人の常の仰せの「弥陀五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人が為なりけり、されば、そくばくの業を持ちける身にてありけるを、助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」の仰せごともしのばれます。

先ず仏前にて阿弥陀経を読誦し、続いて歎異抄を十章まで拝読。いつも乍ら序文の「幸に有縁の知識に依らずんばいかでか易行の一門に入ることを得んや」の所を拝読すると声がつまって涙が流れました。まことに「幸に有縁の知識に依らずんば」であります。「好き人」に邂逅すること、善知識に不思議に会わせて頂く、池山先生の御歌に「久遠このかたの故の廻向、私一人を片思ひ」とあります。久遠の昔から善巧方便の限りを尽くして「私一人」を片思いの大慈悲心であります。

さて、歎異抄拝誦を終って、花田先生からの御手紙による参加の文を拝読させて頂きました。

（まえがき）本年の一道会にも四大不調のためお参り出来ませんことを淋しく思っていましたところ、榊原先生からその代り何か原稿を、とのことで早速ペンを執りました。皆様の御姿を偲ひながら……ナム、ナム、ナム。

○

昭和六年の正月、池山先生をお訪ねした時、

たのまるゝたゞ念仏の我にあり、さるべき業はさもあらばあれ

この一首を示されて、今年は還暦を迎えたが、歎異抄の第七章、念仏者は無碍の一道なり云々の一言一句が体験として読めるようになった。その現在から未来にかけて働いて下さることを詠んだと、微笑念仏裡に仰言った。

更に今一首、

惨憺たる悔ひの残せし一一の、跡かたもなき無碍の一道

を示されて、人間も五十過ぎると時々どうにも寝つきの悪い夜がある。そうした時自然に心に浮ぶのはかつて親しくした人々のことであるが、自分が若かったこともあって、相手の心を察し得ないで、我儘の限りをした、丁度爆撃のあとの市街のように惨憺とした後悔ばかりである。しかも相手がまだ生存して居ればおわびも出来るが、すでに幽冥境を異にしている人々には、どうしようもない悔いが残る。それにつけても、大悲の御念仏にかえらしていたゞくとき、その一一が跡かたもなく洗われて行く、ありがたいことだ、と附け加えて説明して下さった。

以上の二首は、本願を信じ念仏申す者の過去、現在、未来にわたって仏の心光が照護して下さることのたのもしさを身をもって信味して下さったものであります。

さて、尊号真像銘文に「無碍といふはさはることなしとなり、衆生の煩悩悪業に碍へられざるなり」とありますが、第七章をいたゞく時いつも思い合わせられることであります。我々の悪業煩悩の軽重如何によっておへだてなく、何処までもお呆れのない大悲心の働きであります。

御存じのように涅槃経に阿闍世王の入信のことが説かれてありますが、提婆達多にそそのかされて、父王を殺害した阿闍世が大慚愧におちた時、耆婆大臣の勧めによって畏る〳〵釈尊の御前に出るのでありますが、阿闍世の為に涅槃に入らずとまで仰言って、待ちに待たれた釈尊が「大王よ！」と呼びかけ給うた時、王は、五逆の大罪人の自分を、大王と呼ばれる筈はないと疑い、左右をかえり見て王らしき人をさがすと、釈尊は、自分の罪に障えられて、疑心の深いのを憐れまれて「阿闍世大王よ」と重ねて呼びかけられた時、驚いた王は「仏心平等にして更にへだてなし」と涙にくれ、やがて「我無根の信を得たり」と随喜したとあります。これ仏心は五逆の大罪人をもへだてないことが身心に徹到した不思議な実例であります。

また、法然上人四十三。十五の時からの修学修行も空しく、渡に船を失ひ、闇に道に迷うという大難関に突きあたられたが、善導大師の観経四帖の疏を読まれた時、凡夫往生の道あり、との仰せに、身の毛もよだつ喜びの中から読み続けられ「一心専念弥陀名号、行住坐臥時節の久近を問はず、念々捨てざれば、正定之業と名づく、彼の仏願に順ずるが故に」の句に、その玄意を得られて、たちどころに念仏の行者となられたのも、十悪、愚痴の悪凡夫をもおへだてない大悲を我身にいただかれたからである。

親鸞聖人も、いづれの行も及び難き、地獄は一定すみかの身に、選択本願の念仏、ただ念仏して弥陀のふところに帰入せられたことは御存じの通りであります。

○

こと毎に、へだて、善ければ金の鎖、悪ければ鉄の鎖、智者も愚者も流す毒、等々はてしなく浮きつ沈みつの流転する身に、無碍の光明こそ唯一の燈炬であります。

清沢満之先生の言葉に「自分の責任ですと云って死んでお詫びをするとなると、生命はいくらあっても足らないし、それで何の解決も得られない。如来にその責任をとって頂いてはじめて安心できる」とあります。

とまれこのおへだてのないまことのこころが無ければ、いたるところが闇である。もう五十年も前のことでありますが、私が学校を卒えて間もない時、榊原先生と御一緒に九州に旅したことがありました。その時、博多の万行寺の七里和上のお墓に参り、更に、仏教済生軍の真田増丸先生のお墓にお参りした時、墓守りさんが次のように話してくれました。

この町に魚屋さんがありますが、その主人が毎月先生の御命日にお参りになります。或日その訳を聞きますと、実はその人が青年時代に、世間からもてあまされるあばれ者であったが、真田先生に感ずるところがあって、先生の塾に入れて貰ったが、先生の御不在の時は、掃除当番にあたっても、今朝は仏様が掃除しなくてもよいと仰言ったからやめた、と云って塾生との間の調和を破るようになった。こんな調子で塾生との折合もつかず、波瀾をおこしてばかりいた。そこで塾生が相談して真田先生の御帰りを待って、追放して下さい、もしそれが叶わねば、皆が出て行きます、と申出た時、先生はしばらく考えられて「君方は何処へ行っても立派にやって行けるが、彼はそばに居てさえもひどいことをする人間だから、手放すことは出来ない。申し訳ないことだが、諸君に出て行って貰います」とのお答えであった。そのことを隣室で聞くなり、先生の前にとび出して泣いてお詫びをし、すっかり変った人となった。その先生亡き後は墓前に必ずお参りしているとのことであった。

○

さて、私自身がこのおへだてない仏願のまことを知らされはじめましたのは、岡山の高等学校の頃でありました。それまで、善くなれ、賢くなれ、でないと世間から捨てられるぞと、父母をはじめ、周囲の人々からくりかえしまきかえし聞かされておりました。そこで手あたり次第に或は孔子、ソクラテス、聖書等をかじり読みしましたが、ものになりませんでした。当時世間に知られはじめた西田天香師の一灯園に大阪の乞食の聖者と称えられた清水精一氏の

62.4.12

御紹介で、入園しました。下座行の実践のために托鉢生活の真似事をいたしました。それと云いますのも、落ちてくる林檎に驚いてニュートンの引力の発見があったように、すべてに頭を下げて見且つ聞くことが大切なことを知らされていましたので、進んで托鉢をはじめました。ところが形は頭を下げていましても、心中は俺はよいことをしているぞと下座でなく上座しているのに行き詰り、みのる程頭のさがる稲穂かなと云うが、自分が空っぽなために頭を上げてばかり居る、何と愚か者であろうかと、知らされました。こんな調子で身辺のよき教は皆落第となった時、私の伯父とドイツ語の池山先生のお勧めで歎異抄をひもときました。殆んどわからぬことばかりでしたが、第一章の「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず」の一句に驚異の眼を見張りました。と云いますのも二元対立の相対差別の世に、おへだてないまことは何処にも見出せません、これは聖人の理想の言葉とも疑いましたが、顕真実を生命とされる聖人が単なる理想を説かれる筈はないと思いかえした時、夜空に月光が皎々と輝くのは、太陽の光の照り返しであったと想到し、聖人御自身が弥陀仏のおへだてのない願心をいただかれたうえ、自然の照り返しとしてこの金言があったと知らされ、そこに、私の心のふるさとは弥陀の本願であったと暗い心に一縷の光がさして来ました。まことにささやかな体験でありますが、申し添えます。

終りに、徳富氏の瀬戸の海浜にてと前書きして、

人の子が貝堀りおこす砂浜を平になして潮の寄せ来る

という一首も忘れ得ない歌であります。

更に、臼杵祖山老師の遺詠に、

さはりなくすべてを照すみひかりは、さはりある身のうへにこそ照れ

とあります。これは老師が直腸ガンで最後の病床にあっての仏光讃嘆の歌でありました。

無碍の光、おへだてのないおまことは、煩悩具足の凡夫の何処でも何時でも碍りばかりで、業繋にしばられてはてしなく苦悩する私共のためであるとの慚愧と感謝のほとばしりの讃歌であります。

障りがなくなるのでなく、碍りのやまぬのをかねてしろしめす大悲の摂取不捨のたのもしさであります。

池山先生追慕の年一回の一道会に、無碍の徳光を渇仰し先生が懇ろに身をもってお導き下さった御恩の片鱗をしのび念仏裡に御礼を申上げます。併せて皆々様の御健勝を祈念いたします。

○

続いて私の話の録音を聞きつゝ、記します。

（昭和六十年十月末日）

暫くお話させて頂きます。

「御慈悲」とは、鈴木大拙師の訳ですと、「コンパージョン」とあります。「コン」は「共に」、「パージョン」は「楽しみ」で、「共に分け与える」これが「慈」です。「悲」とは天台の摩訶止観に「誓ひを起して他を悲しむ」同情する、憐れむ、苦しみを除く」と仏教辞典に出ています。悲ということをしらべてみたのですが、これ程（原稿用紙の束を見せて）あり、皆読みませんが、まず正信偈には「應報大悲弘誓恩」「大悲無倦常照我」とあり、大経和讃には「弥陀の大悲深ければ、仏智の不思議をあらはして、変成男子の願をたて、女人成仏ちかひけり」、「尽十万無碍光の、大悲大願の海水に、煩悩の衆流帰しぬれば、智慧の潮に一味なり」と曇鸞和讃の中にあります。聖人の八十八才の時の最後の御和讃に「像末五濁の世となりて、釈迦の遺法かくれしむ、弥陀の悲願ひろまりて、念仏往生さかりなり」「釈迦弥陀の慈悲よりぞ、願作仏心はえしめたる、信心の智慧なりせば、いかでか涅槃をさとらまし」、また「弥陀智願の広海に、凡夫善悪の心水も、帰入しぬればすなはちに、大悲心とぞ転ずなる」「如来大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし、師主智識の恩徳も、ほねをくだきても謝すべし」と、「是非しらず、邪正もわかぬこの身なり、小慈小悲もなき身にて、名利に人師をこのむなり」これは自然法爾章の終りにあります。

御本典、教行信証の教の巻に「如来無蓋の大悲を以って三界を矜哀す」とあり、行の巻に「然るに斯の行は、大悲の願より出でたり、即ち是を諸仏称揚の願と名づく」と。「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静にして衆禍の波転ず、即ち無明の闇を破し速に無量光明土に到りて、大般涅槃を証し普賢の徳に遵ふなり」と。御浄土へ参って百味の飲食を頂いて、じっと坐っているのでなく、それから直ぐ「普賢の徳にしたがふなり」とある、普賢菩薩の普賢とは慈悲であり、文珠菩薩の文珠とは智慧のことです。だからすぐ娑婆に出てきて衆生救済に働かれる。釈迦往来八千辺といゝます。信の巻には「願作仏心は即ち是れ衆生を摂取して安楽浄土に生ぜしむる心なり、是の心は即ち是れ大菩提心なり、是の心即ち是れ大慈悲心なり（略）大慈悲は是れ仏道の正因なるが故なり」と。仏様の御心は大慈悲で固まっているのである、と信の巻で仰言って居ります。

証の巻には「それ真宗の教行信証を案ずれば、如来大悲の利益なり」一緒に悲しんで下さるのであると。

真仏土の巻には「正道の大慈悲は、出世の善根より生ず」とは、「平等の道を名げて正道と為す」と所以は、平等は是れ諸法の体相なり（略）発心等しき故に道等し、道等しき故に大慈悲等し、大慈悲は是れ仏道の正因なるが故に正道大慈悲と言へり」。慈悲に三縁あり、一には衆生縁、これ小悲なり、二には法縁、是れ中悲なり、三には無縁、是れ大悲なり、大悲は是れ出世の善なり、安楽浄土は此の大悲より生ぜるが故に、此の大悲を謂ひて「浄土の根」と為す、故に「出世善根生ず」と曰ふなりと。

化身土の巻に「釈迦微笑の素懐を彰し、韋提別選の正意に因りて、弥陀大悲の本願を開闡す、斯れ乃ち此の経の隠彰なり」と弥陀大悲ということを仰せられています。

又、文類正信偈の中にも「無上大悲の願を建立し」慈悲深遠にして虚空の如く」とあります。又、二河譬喩の中にも『「釈迦発遣して揮へて西方に向はしめたまへることを蒙る」といふは順なり、又、「弥陀の悲心招喚したまふに籍る」といふは信なり』とあります。

その他、尊号真像銘文とか、御文章にいたるまでこのように拝見して集めたものであります。

○

こゝで私、大悲心ということをお話したいのですが、「和光同塵」（光りを和らげて塵に同する）ということです。例えばお父さんが会社で一日働いて疲れた身体で我が家へ帰って来る。すると子供は待っていたとばかりに、父ちゃんお馬になって、と云う。父は疲れた身体を四つんばいになって馬になる。子供はそれに乗って「ヒヒーン、ヒヒーン」と云うてともとめる。父は馬の鳴き声をする。（これは私の近所で実際あったこと）。

これが大悲心です、和光同塵です。その胸に、私の煩悩に一つになって下さる。私が腹をたてる時は、一緒に腹を立て、下さる、「私もそんな時があればその通りだ」と同一になって下さる、機法一体になって下さる大悲心であります。「如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし」と恩徳讃にありますように、実生活の中に実践し活かして行きたいものであります。小野清一郎氏は、これが教行信証の行の実践だと云われます。

そういう大悲心というものを、実際に行っていられた人が、昔のあの一休禅師です。禅師は京都の紫野の大徳寺の住職、大徳寺派の管長さんです。「元旦や、冥土の旅の一里塚、めでたくもあり、めでたくもなし」と歌ったり、元日の朝から杖の先に死者の頭の骨を突き差して「御要心、御要心」と云うて歩き、死は元旦にもやって来るぞ、と戒めています。禅師は頓智に富んだ人で、或る人が襖に描いてある虎の絵を指して、あの虎を縛って来いというと、承知したと縄を持って走って行って「さあ、追い出せ！」と構えたという。このように「頓智笑談」として笑い話の手本

のように思わされていますが、その頓智とは一段と高い鋭い智慧のことで、ものの真実即坐に刺し示すことでありましょう。

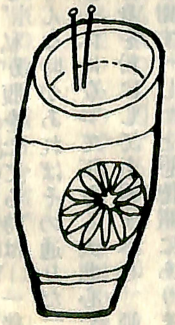
その一休禅師が或る時、在家の法要に弟子をつれて行き、終って大徳寺に帰って来て門を入ろうとした時、雪に脚をとられて転倒された、が、仲々起きて来られないので、弟子が傷ついたのかと思って、どうされましたかと尋ねると「わしは雪の降るのを横から見たことがないので、それを見ていたのだ」と言われたという。

その一休禅師ですが、或る四十才位の盲目の女人があり、盲人の故に嫁に貰う人もなく年を重ねて四十才になっていたのです。それで禅師は一夜、一緒に枕を共にして慰めたと。これが大悲心であります。

又、「駿河の国に、どえらいものが二つある。一つは富士の高峰で、も一つは原の白隠という。富士山と相対して偉大さを賞揚されるのが原宿の白隠禅師であります。

禅師を心から崇拝して禅に励んでいた居士があった。所がその居士なる父も娘が恋人があって遂に身重になり、一子を産みおとした。そこで親は怒った。すると娘は父の崇拝してやまぬ白隠さんなら許してくれようと思って、これは白隠禅師の子であると云った。すると親は禅師に向い、あなたはそんな下劣な人だったのか、姿と心と白と黒で、売主坊頭も甚だしい。この子を持って行け、と云うと、禅師は、あゝこれは私の子だったのか、と抱いて、それから毎日乳もらいに、彼方此方に廻って育てゝいた。娘は遂に堪えられないで懺悔の涙にくれたという、これも大悲心の実践であります。

最後は譬ですが、蓮根は、泥土と泥水の中で、それを養分として成長しますが、その泥水と泥土から脱け出して、一輪の白蓮華を咲かせて、あたりに芳香を放ちます。これが大悲心をよく現わしています。光を和げて塵に同じて下さる如来様の大悲心をお伺い申しました。



62.5.10

無相師法語

〝真宗的無常とは〟 (一)

岩崎成章

普通いつ死ぬともわからんとか、人間は皆死なねばならんとか、咲いた花が散るとか、云うが、聖人における無常は、そういうソトのことではなしに、もう一つ無常というものが、わが心が無常であるということを、それこそ照されて思い知らされるということがあるのでないか。

我が心が無常であるとは、大丈夫そうで一寸もたのみにならん、と云う無常、問題はこの心がたのみにならぬ、病気がひどくなると、煩悩がうすくなるという、身体が元気になるとこっちの心がたのみにならん。あゝも思い、こうも思いはするけれどかわりづめ。自分の根性がよいことも思うけれどすぐに変る、如何にたのみにならぬか、内面的無常を聖人がお感じになったのでないか。煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもてそらごとたわごと、まことあることなきということは、よろづのこと、心で私の思うこと色々と変りづめ、因縁次第損得次第、名利愛欲の御都合次第で変りづめ、一寸もたよりにならん、かわりづめ、だから煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、この身もこの世も、本当にたのみになるものなし。一事が万事、そらごとたわごとまことあることなし、たのみにならん、自分だけたよりに思っても、いくら頑張っても、頭がボケてくる、我が内面の心はたのみにならぬ、そこに夕夕念仏のみぞまことにおわします。心にしても身体にしてもコロコロとてんどうする、てんどうしまた虚偽である、一寸もまことがない、だからたま〳〵浄信をえば、この心テンドウせず、この心コギならずとは凡夫の心ではない、凡夫の心は若存若亡する、信心いただいたと思うけれど、すぐありがたい、コソバイが何処かへ行ってしまう、身も心も生活もいろ〳〵かわるからあてにならん。

何をホントーの究極にたのみになるか、我が身もたよりにならん。自分でよく解る。おもてはかわらんようだけれどハラはかわる。そういう真宗的無常は内面的に信心の方から云えば、無常であるからたのみにならんと云うことで

×安永元 1772
安政5 1858 (87)
法然の弟子。
横死1件 終世独身

ある。この心顛倒せず、この心虚偽ならずということを、この言葉によって御縁にあい、顛倒し続けている我が身をその言葉によって知らせて頂く。きりがないけれど御縁にあえばあう程、それほどとも思わなんだけれど、こんなに変りづめたのみにならんと、常にテンドーし常にコギであるのがこの私である。その姿を自分で自覚したように思うのはうぬぼれや、自分の悪いところに気がつく奴でない。常に自分を高くかい、我が身が全く零点であかんと思う奴でないものが、そういう風に気がつくとは如来の信心の智慧に照らされて、我が身の姿が思い知らされてくるので、我が力で思い知ることが出来ぬ、これが仲々わからん。

自覚々々とこの頃はやるが、その自覚は他力廻向の信心の智慧によりて我が身の姿がこうとわからされた自覚でなしに、歎異抄の自見の覚悟で、テンデ〳〵の考えを自覚自覚というている。大方が、御廻向の信心を頂かないから、信心の智慧によりて我が身がこうだと自覚しているのでない、大方ほとんどが自分（凡夫）の考えで（自見の覚悟）で自覚と云うている。そんなものは自覚でもなんでもない、信心の智慧によりて我が身はこうだと思い知らされた自覚、大学の先生であろうが、坊さん、在家であろうが同じ自分の智識、あたまでそういう話をきいたり、よんだり、考えたりしたことでくみたてて自覚々々と云っている、それはそらごとたわごとである。それはひとごとではない、聖人の時代からそうで、聖人は、真なる者は、はなはだもって難く、実なる者は、はなはだもってマレなりと仰言るように本当にかの「行信両座」においても、信の坐についたものは、四、五人であるというように、それは伝説にしてもまことに真実信心の人はメッタにおらん、まことにマレなり。

大学の先生も全部未信の人でも仕方がない、坊さんも全部未信でも仕方なし、メッタに真実信心の人はおらん、メッタに聖人の仰言ることのわかる人はおらん。個人の安心、信心はチッポケでつまらんという、そして知識的にわかって自分ででっちあげて教義は伝えるであろうけれど大部分がそうなんだから、よくてもわるくても真実信心の人をふやすことは出来ぬ。信心は個人の力では得られんが、香樹院師でさえも、ある女信者に「俺が信心をお前にやることが出来るなら、お前の胸かきわけてでも信心をやる」と涙ぐんだとある。×香樹院師の如き善知識でも信心を与えることが出来ぬ、まして我々の力では自分の力で御信心は獲得出来ぬ。ひとえに弥陀のおんもようしにあづかって、念仏もそうだが、如来よりたまわらなければ真実信心の身になれぬ、定散自力の称名までどうにか行くとしても、定散自力の称名は果遂の誓に帰してこそ、教えざれども自然に真如の門に転入する。果遂の力によらねば十八願に転入出来

ぬ。ともかくも、何よりも自分自身の信心がはっきりなることが大切である。そうでなければ自分に根がないから水掛論になってしまう。

それで照らすもの照らされるものと云うことで云えば、たま〳〵浄信を得ばの浄信は、これは如来に属するからこの信テンドーせずこの信コギならず、照らすものを頂いた自分、照らされる私はまことにテンドー、コギの人間である。真言で、我即大日、我即仏の教義を五年も聞いて、真言と真宗を往復して御縁にあえばあう程、自分は仏といわれん、即身成仏、この世が浄土で、この世で御信心頂いたらサトリであると云いたかったが、とてもサトリとは云えない。こんな根性さげていて。しかし如来聖人のおかげでこの世この身でお念仏一つでサトリの身にさせて頂けると云う道に出させて貰ったが、果して浄土があるかないか、浄土に参れるか参れんか、〝浄土に生まるるタネにてやはんべらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん〟そんなことはわからんなりにただ念仏のほかない。如来の仰せのまんまにナンマンダブツの外ない身にさせて貰って、地獄におちようが極楽に参ろうが、如来聖人の仰せのままに唯念仏一つと云う身にさせて貰えたから落付けた。

如来は照らすもの、我れは照らされるもの、大信心は仏性なり、仏性即ち如来なり、とある。これからゆくと御信心を頂くとは、その御信心、大信心はその実は仏性を頂くことである、如来を頂くということである。如来はこの身に来たりて、この身を離れんようになる、それを信心を頂くということになる。大信心は仏性なり、仏性即ち如来なりというこの信心は実は信心仏性である、これは如来である。信心はたま〳〵浄信を得ばこの心テンドーせず、この信コギならずと云うことは、如来はテンドーせず、如来はコギならずということで、如来といっても本願といっても願心というても同じこと、大悲心というても同じ、如来の願心大悲心はテンドーせず、コギならず、それを頂いた側のこちら（凡夫）はよろずのことみなもてそらごとまことあることなし、常テンドー常コギである。これが仲々ワカラン、如来廻向の信心の智慧によって、この照らすはたらきによってこの身この世というものはよろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることないと思い知らされる、徹照されて照らすものから照らされて、我が身はこの身もこの世もまことあることなしと知らされる、自分では自覚出来ない。この頃の若い人は自覚々々と云うけれど自分ではわからん。よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなしとは自分ではわからんから大きなことばか

り云うている。ところが照らすものに照らされて我が身は煩悩具足の凡夫火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることないと云うこの世、この身であるとなると、頭の上らん自分であると知らずに頭ばかり上げてリクツばかり云うている。指導者意識が非常に強い、自分が被指導者とわからん、共々に聞かんならん者ということがわからぬ。煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなしとは、参る同行も坊さんも、講師もそうや、親鸞聖人もそうや、宗祖御自身もそう思うている。そらごとたわごとまことあることなし、そこでただ念仏のみぞまことにておわします。講師、大学の先生だけでなく、聖人御自身が、自身は現に罪悪生死の凡夫という御信心を頂いて機の深信にある。だから聖人を初めとして師弟子共に御同朋御同行として照らされて、聞かんならんもの、共々に。それが七百年のうちに坊さんの位置を自他が、指導者意識に固めて、お寺に生まれて十二、三才から説教する、同行がホメマクル、十二、三才から自分が指導者として育って来ているから我が身がわからん、如何に虚仮不実かが。

○

照らされるもの、御信心が獲得せられて、その頂かれた御信心に照らされると、如来が凡夫に、仏心凡心一体となって、信心獲得となって、これが御廻向の信心であるが、この信心に照らされると、凡夫というものは、照らされた姿が、自分の信心がないということ、信心を頂いてこそ、自分というものは信心があると思うていたが、とても信心などみじんもない自分だとわからされる。御信心を頂かないから自分が無信心とわからん。御信心がいただけてこそ自分がツユチリほども信心ゲのない、無仏法の自分とわかる。よろずのことみなもてそらごとたわごとまことあることなしと云うことが、ただ念仏のみぞまことにておわしますというその本願の名号、如来廻向の称名によりて自分が無信心であり、おれが称える念仏は自力廻向の念仏であって、真実信心の称名でないと、本当の念仏はようとなえんと廻向の信心によって知らされる。だから御廻向の信心を頂いてこそ、これは常テンドウ、常コギとわかる。この信テンドウせず、この心コギならずという御廻向の信心によって我が身は常テンドウ、常コギであるということがわからされる。それでなければわからん。わからんからこそ得た得たといって威張っている。得たも得ぬもない、信心を得たとても嘘や、信心を頂かねば信心ゲのないということがわからん。照らされた姿が極重悪人とはっきりする、煩悩は煩悩でも罪重深重煩悩熾盛とわからされる。照らすものとしての御信心が廻向されなかったらこのすがたはわからん、悪人は悪人でも極重とは思えぬ、罪悪深重とまで思えなかった。

真宗の教義を聞いたり、本を読んだり、自分は悪人です、日常生活の上に嘘や、ごまかしたり、適当にいじわるいこともするし、その程度の常識的悪人、煩悩人であると思うが、極重、深重と思えぬ。自性悪、本性の姿が照らすものに照らされて、照らされきって、徹照されてこれがわかる。

聖人のものを拝読すると、他力廻向の信心によって照らされて〝そくばくの業をもちける身にてありけるを助けんと思召したちける本願のかたじけなさよ〟と仰がれている。善導さんの二種深信もそうや〝自身は現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなし〟と御廻向の信心によりてハッキリしてくる。御廻向の信心において極重悪人は唯称仏とただ仏の名を称えるより助かりようがないと御廻向の信心によりてわかる、極重と知らされ、唯称仏と法を仰ぐハタラキも御廻向の信心によりて、そう云うふうにお念仏が頂かれるようになる、唯称仏と。

聖人の常の仰せ〝親鸞におきてはただ念仏して弥陀に助けられまいらすべしとよき人の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり〟で、親鸞におきては、極重悪人の親鸞におきては、無有出離之縁の親鸞におきては、法の深信として阿弥陀仏の四十八願はどうのこうのと云うただ念仏、称我名字と願じつゝ、若不生者と誓いたりとする、その弥陀の本願、法によらなければ助からんと云うことがそういただけるわけで、二種深信でいつも云うている。聖人はこれを味われて、この機は絶対に助からんものであると御廻向の信心が照らし知らしめ、その者は唯称仏、弥陀の本願より外ないと御廻向の信心が思い知らせて本願をたのむと云うことになる。本願をたのむとか、本願を信ずるとかは凡夫の心から出てこない、御廻向の信心によりて本願をたのみ、本願を信ずることになる、だから信心を廻向されなければ、弥陀の智慧をたまわらないあいだは、自分の心や、自分のおこないをたのみにしている。ところが弥陀の智慧をたまわると、我が身は現に罪悪生死の凡夫と云うことが知らされて、しかもそのものはもう称我名字、若不生者不取正覚の本願をたのむほかないとはっきり思い知らされる、これが普通説教を聞いて、俺は悪人だ、この悪人をお助け下さるそうなと、そんなのは信心でもなんでもない、教義を聞いておぼえているのである。説教する坊さんにしても、聞く同行にしても、真宗の教義やすじみちを聞いてわかって覚えて、私は悪人でございます、このまま助けて下さるそうなと何べんそんなことを云ったところで、一時は感激した処で、凡夫の考えやから若存若亡を出ない。それは若存若亡であるぞよ、そんなものでは〝往生一定と思うも、凡夫の思い、往生不定と思うも凡夫の思い、その二つを捨

て弥陀をたのむのじゃ〟と香樹院師は仰言る。然しその二つを捨てて弥陀をたのむと云うことは凡夫では出来ない、信心について、往生不定と思うも凡夫の思い、往生決定と思うも凡夫の思い、こんなものがあゝ思うたり、こう思うたりすることが、何のたよりにもならんことを御廻向の御信心によって思い知らされて弥陀をたのむのじゃと、二つを得たとか得んとか云う思いを捨てゝ、たのみにしないで、弥陀をたのみにするんじゃ、と云うことは御廻向の信心によって思い知らされることで、これがその話を聞いて、覚えてそんなことどれだけ稽古しても若存若亡である、ハッキリしている。

源左の智慧

辛川忠雄

昭和六十年

花田さんの便り

去る五月十二日の中外日報に御寄稿の「源左に腹を立てた昔話」まことに有難く拝読しました。「おらがやあなもん」との自照が「ようこそなあ」の感謝に転じている消息がよく知らされました。近角常観先生から「相手の欠点が見えぬような交際は真の交りでない」とお聞きしましたが、因幡の源左のありのままの姿をもっと御紹介下さい。

○

源左に腹を立てた昔話

以下は中外日報に寄せたその時の話である。これは柳宗悦氏の著「妙好人因幡の源左」にも羽栗行道師著「源左同行物語」にも発表してないもので、源左はやはり生き仏さまではなくて、ただの人間であったなあと私がこの眼でたしかめ、この眼で見届けた源左の一面を御紹介することにする。然し源左の自督はあくまで「おらがやあなもんをようこそなァ」であったから、おらがやあなというこの罪業深重の源左の慚愧をこの一挿話が一層はっきりさせるのであって、ともすれば、源左は妙好人であって、いつもその心は浄土に住み遊んでおるものの如く錯覚せられては大変であって、著書で読むだけの人には凡夫の源左、人間としての源左を見失いがちだから、それでは源左はかえって心外だろうと思われるので、ここに特にこんな古い出来事を紹介する。前口上はこのくらいにして、さて本論だが——

○

それは昭和四年か五年かの秋、私が京都から自坊に飯った年だったが、私の弟が腸チフスをやった時のことである。

伝染病を恐れて近所も壇家も誰一人寺によりつかない。そこへたま〳〵源左が訪れたのだから、われらは地獄で仏に会った気持で、母は源左に頼る。源左は紙の行商と共に熊の胃をアルバイト的に商っておったから、この時も熊の胃かなにかの胃薬を病人にのませたにちがいない。熊の胃薬は相当高価なものだが、そこは源左のこと、原価計算はおろか、その代金さえ貰ったり、貰わなかったりで、私の寺とて例外ではない。ともかく、母を助けて看病をしてくれたのだが、問題はこれからなのです。わが寺の総代の某家もまた源左の熱列なファンであったから、彼がこの町へ来ると、寺を宿にしたり、総代に引止められてそこに泊ったりして、三日でも五日でも逗留しては、毎夜のように源左を慕う同行衆と共に御縁に合うのが例であった。

ところが、この度は寺の次男が悪疫だというので、総代は寺には寄りつくなと忠告するし、私達寺族は彼を相談相手にする。拒絶の出来ぬ好々爺源左は、心は二つ身は一つおそらく進退きわまったにちがいない。忘れもしないが、源左が逃げるように下駄をはくのに私が追いすがった時、源左の狼狽振りは今もハッキリ眼に残っているが、それにもかかわらず彼は私をふり切って総代の家に去ったのであった。

この時私は源左に失望した。そして、源左も凡夫なり！と世間で、生き仏といわれたものの限界を見届けて、大きなため息と共に、玄関に腰をおろして呆然と彼の後姿を見送ったことであった。この瞬間のこの光景が三十年経った今日までハッキリ忘れずに記憶せられておるのは、源左も失張りただの人間であったこの失望感が余程深刻に応えたらしく、今からふりかえると、源左本人は病気が染るなどのことには無神経であったであろうが、総代からは寺に行くなといっても、見舞わずにはおられなかった源左だけに永居するとこの大檀那に叱られたり、心証を害することは堪えられなかったのである。自主的な行動よりも他人の立場で物を考える源左。多少の慾と名利心は温存する源左。若い住職の哀訴をふり切って、力についてまわらねばならぬ源左の弱い人間性をもっと克明に記入して、後日の源左研究の参考にとも考えるが、ここでは何等の奇蹟も絶対なかった、ただの源左であることを証明する一例を寄稿したに止める。

これは源左にけちをつけるためではない。源左の真実を伝えたい熱願からである。だから、今頃源左はお浄土で、そうだ〳〵、ほんだ〳〵、その通りであったと、源左の自督である「おらがやあなもの」に忠実なこの発表に対して満足の微笑を送っておるであろうと、またしても凡夫のへらず口を叩いて、彼がああまで妙好人としての尊い所以は彼がいつも「おらがやあなもんをようこそなァ！」をくりかえして念仏していたところにあることを語っておく。

「のれんと山門」より

あとがき

年頭　謹しんで賀し、おくればせながら賀状にかえさせていただきます。皆様の御念力と諸先生の格別の御援助をいただいて三十八巻第一号をおとどけいたします。

○

近角先生の大悲廻向のお導きをいただきました。至心も信楽も欲生心もひとえに弥陀廻向のたまものであることを詳しく教えられました。

井上先生の「心の住家」は、ことに最近は物は豊富になりましたが、「依食足りて礼節を知る」でなしに、自分の真のよるべ、心の故郷を忘れたさまよいが続いております。この時真の心の住家を指差して下さいました。

西元先生は文字通りの東奔西走の御生活の中からわざわざ御見舞下さいました。何よりも御夫妻の御健康を喜びました。

榊原先生から「一道会の記」を早々に頂きました。次号に続けていただきます。痼疾のため本年も欠席いたしましたが何か原稿をとのことで、池山先生を偲びながら無碍の一道を讃仰させて頂きました。榊原先生は、大悲の尊さを聖人の御聖教から詳しくお話し下さいました。籠居のまゝに京洛浄住寺を想い浮かべて拝読いたしました。

岩崎先生の「無相法語」で真宗的無常をきびしく教えられました。聖徳太子は家にあっていつも「世間虚仮、唯仏是真」と申されたと、橘姫のマンダラの裏に誌して下さいました。聖人と一味の信海を仰ぎました。

辛川忠雄さんは鳥取市の方でありますが「のれんと山門」という本に、遺稿がのせられました。源左同行と因縁の深い方で、而も、唯表面的な源左同行でなしに、内面の煩悩と離れぬ大悲の至極を讃仰して下さいました。とかく妙好人の伝記は、人間離れした点が多く、大地から足が離れぬ、凡夫ばなれしたものが多いのは残念なことであります。

○

十一月末に、西元先生御夫妻の御見舞をいただき、一期一会のよろこびを頂きました。身体が不自由になるにつけまして、ことばのありますことの有り難さをあらためて見なおしております。ことばを門として皆様と心で出入りさせて頂いております。それにつけましても、弥陀仏が、ナムアミダブツと名号をお与え下さることの片鱗を感佩させていただきました。

おことわり

一月と二月の例会は痼疾のため休会します

定価　半年　八〇〇円（送共）
一年　一六〇〇円（送共）

印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　天野昭夫

発行所　名古屋市南区駈上一丁目十三番地　慈光社

編集・発行人　名古屋市南区駈上二丁目十三番地　花田正夫

電話　八二一局七〇三七番

振替口座　名古屋　六一〇四三番

郵便番号　四五七

慈光　第三十八巻第一号　昭和六十一年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可